



日本三十三年十一月二十六日禮拜日

明治三十三年七月一日發行

目次

社説

◎教界の最大急務 (續)

社會

◎印度飢饉の慘狀◎北清の騷亂◎大谷派
 大學移轉◎西本願寺學制變更◎都下に於
 ける佛教婦人會◎四恩瓜生會の現状◎德
 風夜學舍◎教界の彙報

雜錄

◎漫筆

文學士 石川簡堂

◎窮兒惡化の狀況

信界

◎克己の心

文學士 清澤滿之

會報

◎各地巡回記事◎山梨各地に於ける演說會◎相摸
 東國 佛敎國民同盟會◎群馬室田村に於ける演說會◎讚岐四國佛敎
 盟會大會◎千葉樹徳會の演說會◎下野高田明院に於ける演說會

改教時報

第三十四號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育時に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

教界の最大急務

(續第三十二號)

之を要するに、余輩は學んで厭はず教へて倦まざる底の氣風を養成せん事を肝要と信するなり、固より人各能あり不能あり、人々其所志を異にするを以て、何人をも驅りて以て教育の施設に由り、氣風の養成次第に因りては、教育振興策も未だ絶望して懸を投すべきにあらざる、夫等の方法如何といふに付ては諸宗各特有の情實あり、各派皆別個の歴史あり、其情實歴史の弊害は無論排除せざるべからざるも、去りて其情實歴史とて一概に悉く排去すべきにあらざれば、到底詳細に論ずべからざるも、一言以て之を蔽へば教育事業を今日より幾層倍尊崇し之を神聖にするにあり、各宗本山の教育事業を見るに決して之を神聖視し、之を崇敬する状は見えざるなり、是を以て其教育は唯申譯的となり、裝飾的となり、校舍は假令輪煥の美を盡すと雖も、其教育には主義なく精神なし、是に於てか教育費は能ふ丈け、削減せられ、其教授講師たる者は其待遇低くして、無學不術の俗的事務員の下位に班せしめて、事務員は之を願使せんとするを通例とす、斯る状態なるを以て有爲の士は我豈五斗米に膝を屈せんやとの意氣を以て、一日も早く其職を遁れて其好む所に自適するが、若

政教時報第三十二號目次

- 社説 讀史所感(下)
 論說 感化院の設備に就きて(常盤大定)
 社會 宗教家の狹量(名譽等)
 雜錄 北遊襍記(木多高陽) 窮兒惡化の狀況(續)
 信家 少慾の心(清澤謙之)
 會報 各地の景況

本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(二日、十五日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 - 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年六月廿日印刷 發行編輯人 上村幸三郎
 明治三十三年七月一日發行 印刷人 清水朝太郎

くは學者教師となるを不利として事務員となりて腕を振らんなど志す者多きなり、斯くの如くなるを以て現注の教職員なる者は其位置を榮譽として其職に戀々たる者は論外なれども、有爲者は其職を煩累に堪へずと感ずる者多きは理勢固より然らしむるなり、

抑兩本願寺が現今の如く教界の霸王となりて、威を振ふに至りし原因は那邊に存するとするか、其原因固より一二に留るべからざれども、徳川氏時代三百年間他宗他派には、殆ど修學の機關備はるものあらざりしに、兩本願寺は夙に學校を設けて盛に教育したる者其一因たるは殆ど疑ふべからざる、當時兩本願寺が如何に教育に熱心にして、如何に學者を尊重したるかを知らんと欲せば、之を其學場の制規に見よ、西本願寺の能化職なる者は、其一宗に尊重せらるる事は非常にして、活如來と仰がれ一宗の專制君主たる法主と雖も、學場に在りては亦弟子の禮を取りしといふ、東本願寺の講師職亦能化職の大にして一宗の僧侶を督勵したりき、斯くの如くなるを以て、幾萬の僧侶は能く學に従ひ、學階を尊重したり、故に當時西本願寺の學解は大に進歩し、學派の争も熾となり、遂に三業惑亂口稱の異解等ありて、頗る搔擾を極めしと雖も當時の學者は憚たる其生氣、稜たる其氣骨、儒夫をも立たしめ、頑夫をも廉ならしむるの概あり、其争論の如きも其熱心其赤誠、其雄大なる寧ろ一世の偉觀たるを失はざるなり、之を今日兩本願寺の學僧等が氣息奄々として一隅に屏息し、俗吏の膝下に叩頭する者のみ多きに比すれば、嗚呼今昔の感に打

たれざるを得ざるなり、之を聞く、東本願寺の副司心師少壯已に儒術に長ず、彦根侯之を聞き、高祿を以て辟す、師辞するに其志一山の講師たるにあれば、則々秩祿の如きは望む所にあらずるを以てせりと、以て如何に、彼學頭職の重せられしか其一斑を窺ひ得べきなり、然るに兩本願寺はかの口稱三業の安心騒に懲りて、大に學風を保守的傾向に向はしめ、學者の待遇を低下せしより、爾來學解の進歩を妨げ、俊邁なる學僧を生せざらしむ、維新以後又一層學者の待遇を低下し教育を輕視するに至れるより、遂に高材逸足の者は此範域に留まらざるに至れり、各宗全然一様なりといふを得ずと雖も皆其傾向を一にせり、教學の不振、人物の欠乏此所に因由するもの大なりといふべし、然れば其救済策たるや他なし、學事を尊重し、教育の爲には費を惜むべからず、若し夫が爲に他の事業を疲疲せしむるの憂ありとするも、暫時の事なれば願慮するを要せざるなり、萬事を擲て全力を教育に傾注する亦可ならずや、若し斯く宗内一般の大方針として學者を尊重し、教育の任に當る者を優遇し、本山歳出の大部分は教學費に充つるに至れば、各宗の教育も當然として起るに至るべきなり、元來現今の如く事務役員は教職の上階を占めて學者教育者其息を仰ぐ程の情け無き位置にあるは、教育の何物なるかを知らざりし、明治政府創業の際、教部省に出仕して何教正とかの官職に在りしもの、各宗の事務員となりしより來れる餘習にして、今日の實際に不適當なるのみならず、又我各宗古來の例格にもあらずるなり、余蓋今日各宗の方針を瞥見する

に現今教育に熱心にして重きを置けるは淨土宗を以て第一とすべし、彼宗の教育者も被教育者も、大に學事に奮勵せる状態は決して、分離非分離とか、分立劃一とかに騒ぎ居る曹洞眞言等の比にあらずるのみならず、教界の霸王たる兩本願寺の學事に比肩して餘あるを見るなり、此現狀を持て、過去に鑑み、將來を推すに、我教界に雄飛するものは恐くは淨土宗なるべしと思はる、斯る豫言の當否は措て問はざるも、各宗や今にして醒覺して教育事業に盡し、學事を尊重するの風を吹するにあらずんば、到底教勢挽回の期無かるべきなり、夫唯學事を尊重し、教育を重視す、是に於てか、學者は優遇せらるべく、隨て學んで厭はず教へて倦まざるの人物を輩出するに至るべく、人物の欠乏以て補足するを得べし、斯くの如くなる時は、以て如何なる事業にも手を伸すべく、又成功を期し得べし、否ずして唯裝飾的教育ならしむれば人物は愈々缺乏して、宗教は益々衰弊するわらんのみ、

社 會

印度飢饉の慘狀

(救済は一日も遅るべからず)

今や印度飢饉の慘狀は其極點に到達せんとす、余輩は此に印度大菩提會雜誌及米國のクリスチャン、ヘラルド雜誌等に依り其慘狀を報道し、敢て江湖慈善家諸氏の一顧を煩はさんと

欲す、本年の印度飢饉は實に千八百九十七年及九十八年(即明治三十年及三十一年)の飢饉後毎年收獲少く到底倉廩を富すに足らず本年に至りて遂に再大慘狀を極むるに至りしも、南亞弗利加に於ける英杜戰爭に狂せる英國人は殆んど其領地に於ける慘狀を顧みるに暇あらず、従ふて世の慈善家の注意を惹くと少かりしが、今や日を追ふて、餓屍途に横り、飢民哀を訴ふるの狀、殆んど目もあてられぬ有様とはなれり、就中「グゼラート」の「アーメダバッド」を初め印度の西北部より中央印度は最も甚だしきものにして漸次其範圍を弘め延て他州に及ぼさんとするの狀あり、一片の食料あれば人と犬と相争ふの有様にて、今や飢饉の極、農家は一として家畜を有するものなきを以て、假令六月以後滋雨降りて多少收獲ありとするも、家畜の全滅は農業上其不便困難を感ずるは無論の事にして、恐くは此飢饉は益々甚しきを加ふるならんと思へば、實に一刻も救済の途を講ずることを怠るべからず、一日遅れば何百人の生靈を失ふやも計りがたきとなれば苟も同情の涙あるものは、多少に拘はらず、救助の費を寄附せられたいものなり、新聞の通信によれば、高貴の人は其婦人の金銀珠玉を以てちりばめたる裝飾を賣り、以て飢饉を凌がんとし、家畜は累々、群をなして野原に斃れ、或は婦人は其子を賣りて穀物に代へんべし、或一村にては飢饉に迫り僅かに一箇月八ペンスの家賃にて一家を外人に貸與し、自ら路頭にさまよへるものあり、一夫人、一村を見舞ひしに一家の内、父は既に死し、子は其傍らに斃れ、母は一少兒を抱き、將に死

に就かんとするの慘狀を見るに忍びず、母子を救はんとて其傍らに行きしに、憐れ此時既に息絶え、助くるに途なかりき、全家舉て死に瀕するもの其他枚舉に遑わらず、路傍至る處皆餓屍からざるはあし、印度よりの通信は續々此の如き悲惨の報道を傳ふるを以て、昨年來我東京帝國大學に在學するコマカント、ライ氏は其同胞を救はんが爲に左の依頼狀を發して、普く江湖慈善家の同情に訴へ、其喜捨を乞へり、人道の大本は清淨無縁の慈悲に在り、今や印度の母國は恐るべき一大飢饉に遭遇し、幾十萬の生靈は天を仰いで飢饉に泣き、死地に瀕して藥餌を呼ぶ、政府の救済宜しきを得ざるに非ず、民間の慈善至らざるに非ず、されどもこの猖獗の勢、災害の甚しき、又如何ともすべからざるなり、この時に於て、日本慈善家の眼底に泛べる一點同情の涙は彼に在りては、亦幾多生靈の壽命を死窟より救ひ得らるべきや知るべからず、抑も印度人民の主業は耕農にして、彼等生平の願望は、唯々風雨時を得て、五穀豐熟し、收穫常に超ゆるの一事あるのみ、而るに一千八百九十七年(明治三十年)に於ける風害不作の結果は、幾萬の生靈、家に一碗の炊ぐべきなく、村に一家の寄るべきなく、空しく飢饉を天に訴へ、世界の鬼と化し去るの悲境に陥りたり、而して彼の飢饉の餘殃、尙未全く去らず、民尙菜色あるの今日に於て、再びこの大飢饉に逢ふ、厄運何ぞわが母國にのみ酷なるや、嗚呼試みに思へ、骨と皮とに化したる愛兒を抱き悲める慈母の苦境、

顔色衰へて幽霊の如く、身は唯だ一片の破布その露形を掩ひ、相見て死を俟つもの、人の涙に生死すべき孤兒の寄るべきなくして街頭に蠢爾たる、稚兒の死母を呼べる、愛妻の夫の死に赴く能はざる、餓寒相枕し、一族皆去りて送終一逼の供養だに行ふものなきに至る此の如きもの幾萬、嗚呼亦憐むべきの至りならずや、

夫れ最勝無上の愛は、無縁の衆生に及ぶを以て、その極度となす、是れ實に清淨の慈悲にして、その宗教の如何に係らず、その信仰の有無に係らず、俱に遵奉すべき人道の本なり、大方の志士江湖の慈善家よ、我々の微衷を察せ玉ひ、若しその至情に出るを看破し玉は、その多寡の如何に係らず、印度飢餓の人命を救はん爲に喜捨し玉はんことを懇願の至りに耐へざるなり、

四錢を寄附し玉は、以て一日一人の命を救ひ得べく、壹圓にて一ヶ月間一人を救ふべし、貳圓の高は一人を次期の收穫時まで救ひ、拾圓は夫妻及子の兒を秋まで救ひ、貳拾圓は一家を悉く死地より助け、百圓は五家族を全く救助し得べし、

些少の高なりとも、人々皆寄附あらんことを希望す、

印度飢饉救助金募集發起人

在工科大学 ロマカント、ライ
プラン、シング

右賛成發起人
理學博士 菊池大麓
手島精一

工學博士 辰野金吾 工學博士 渡邊 渡
法學博士 和田垣謙三 法學博士 戸水寛人
醫學博士 片山國嘉 理學博士 神保小虎
文學博士 高楠順次郎 理學士 中村恭平

寄附金は總て左の記名の人に宛送附ありたし、
本郷元富士町一番教師館内學士會事務所にて
荒尾 邦 雄

世の仁人義士、之を一讀し、多少に拘はらず寄附せられんとを切に希望するものなり、

東京本郷區森川町一番地大日本佛教青年會に於ても右救助金募集に賛助すべきことを、ライ氏に約したれば、便宜上、佛教青年會内、眞岡湛海宛送金せらるれば右送附の手續を省すべし

◎北清の騒亂

警報櫛の齒を挽くが如く我國に達するや、上下騒然として事態益々重大ならざるはなし、我公使館員の被害と云ひ、太沽砲撃と云ひ、天津の包圍と云ひ、列國聯合隊の進軍と云ひ、戰雲漢々一として急を告げざるはなし、而して義和團匪今尙勢益々猖獗にして、北京天津は既に危殆に瀕し、其間の交通殆ど斷絶の姿を呈し、北京政府の力を以て容易に之を鎮撫すること能はざるが如し、元來義和團は直隸、山東の二省に起り其目的とする所は、外教殊に加特力敵の排斥と文明の利器たる鐵道の破壊にありと云ふ、然れども其目的決して小ならざるものゝ如し、北京政府の守舊黨と暗

に氣脈を通じ居るを以て政府の該團に對する處置は頗る緩慢にして且つ西太后の如きは剛匪の行動を贊して誠に忠君愛國の至情に出でし義民なりと云ふを見ても最早争ふべからざる事實なり、事情如斯なるを以て如何なる事變を東亞の局面に演出するか豫め測り知るべからざるものあり、

今や各國競ふて兵を進め、帝國も亦陸兵を派せむとす、殊に第五師團に向て動員令を下し出兵の準備をなさしむ、且つ五千萬圓の臨時軍費を支出したるが如きは、當路者の處置宜しきを得たるものと謂ふべし、

◎大谷派大學移轉

同派の眞宗大學移轉に就ては昨年來既に報道せし所なるが、其後一向に抄々しく進行せざりしが頃日に至り愈々工事に着手する事に決し、去月東京に於て入札を行ひ工事請負人も既に定まれりと云ふ、大學移轉地は府下巢鴨村にして敷地は七千坪餘之が經費は七萬圓以上の豫算にして來年一月中を以て竣工すべしとの事なれば、遅くとも來年九月學年の始に於て實際の移轉を見るに至るべし、借學長は何人の手に落つべきか、清澤氏の其職に就かれんこと一般に望む所ならむも、同氏は病軀の故を以て其任を辭すべく、結局村上博士に任命は下るならむ、また現今の東京谷中にある中學を便宜上同所に移さんとの議あり、文部省徴兵猶豫の認可規則に依りて建築を起すとせば、幾くとも八萬圓を要するとの事なるを以て此處行惱中なるが如し、

◎本願寺學制變更

本派本願寺の學制は昨年六月臨時集會(總末寺會)に於て在來の大學林を廢止して佛教大學とし

在來の文學寮を廢止して佛教高等中學とし全國各教區に二十九箇所ある本山末寺共立教授を廢して佛教中學を設置することとなり今年四月より實施のこととなりしが大學は赤松連城總理となりしも高等中學長日野義淵病没して後任未だなし是れは目下新門主に隨行せし執行武田篤初歸朝の曉高等中學長と爲すこと、し夫迄缺員となせり扱て高等中學は今文學寮(下京區松原大宮西入)なるが之を東京に移し進んで大學に入るべき生徒を大に養成せんとのことにて斷然高等中學を東京に移すこととなりたり右に付近日集會を召集し臨時會を開きて本願寺慈善財團發金法則と此の高等中學東京移轉を附議せんこととなりたり東京に於ける高等中學移轉地は高輪泉岳寺隣地にして坪數三千五百餘坪なりと、

◎都下に於ける佛教婦人會

佛教主義の婦人會として、都下に於て有數なるは、福田會敬愛部、目白正法會、小石川淑徳女學校内淑徳婦人會、四谷東佛教婦人會、本郷東京婦人會、淺草貴婦人會、築地本願寺内婦人會、四恩瓜生會等なり、吾人は聞くに従ひ、是等婦人會の過去及び現狀を報道するに躊躇せざるべし、右の諸婦人會の中、發會日猶淺しと雖も、目を追ひて盛況を呈し來り、目下殊に有名なるに至れるは、四恩瓜生會を以て最と爲す、今聞く所によりて、先づ之が過去と現狀を略報せん、

瓜生會

該會の發會は昨年六月にあり、當時の狀況は既に本誌上に掲載せしが如し、該會の旨趣は、三年以前に亡せ瓜生岩子刀自の意を嗣ぎて、矯風慈善の道に進まんとする

に在り、岩子刀自の如何なる婦人なるかを心得せば該會の主
 義目的は明白なる所にして、該刀自の人と爲りば、本誌一二
 三の三號に互りて、略ぼ之を紹介せるが如くなれば、今殊に
 之を繰返すの勞を省くべし、一言以て之を言へば刀自が生涯
 は廢物利用の方法によりて、矯風慈善の兩問題を解釋せんと
 するにありしなり。

發會以後の小史

瓜生會と殆んど相前後して、小石川
 養育院内に四恩婦人會あるもの成立せり、其主趣は院内收
 容者に對し、有志婦人の喜捨により、毎月一回宛施齋せん
 するに在るものにして、其發起婦人及び主に之に盡力せるも
 のは、瓜生會に盡力する婦人と相等しく、且つ岩子刀自は殊
 に同院に關係深かりし因みもあり、目的も相一致する所ある
 を以て、其相分るゝ力を打して一團と爲し、共に々々事を諮
 らんとて、こゝに四恩瓜生會の名稱の下に、同一の方向に進
 む事となり、昨年十月を以て、同院内に於て、初めて四恩瓜
 生會を開會せり、是四恩瓜生會の源なり。

例會の狀況

毎月二十日を期して院内無縁死亡者の追吊
 法會を執行し、講話によりて院内收容者の内心を治し、施齋
 によりて其肉身を養はんとするは例會の必ず之を行ふ所にし
 て、而して法會は好意上各宗順番に之を執行し、講話は碩徳
 を招聘して之に請ひ、施齋は當日集會の有志婦人の淨財によ
 りて之を支辨すとすいふ。

從來の講師

南條文雄、村上專精、北野元峰、島地黙雷、
 大内青巒、河瀬智宏、清澤滿之、等の諸師、快く會意を納れ

史、河野廣中、倉田松壽、前島靜蘭女史等、得意の筆力を振
 へるは、非常の興を添へ頗る盛況を呈せりといふ、來會者
 は會員二百五十餘名、其他二百數十人、總計五百餘名にして、
 さしもの大堂も人を以て埋もれりと傳ふ、

出席者の重なる人

板垣、鳥尾、河野、岩佐、細川、海
 江田、三島、中御門、原、安藤、新井、石井、板倉、税所、村
 田、波多野、大倉、林田、武下、松田、下田、田中、大草、大
 谷、矢野、佐々木、石塚、河瀬、輪島、松平、等の諸夫人、河
 野廣中、河瀬秀治、安達憲忠、松平正一、等の諸氏、此他婦
 女新聞、櫻新聞、報知新聞、中央新聞等の記者、

六月の例會

最新の例會狀況は左の如くなりしといふ、
 例會順序は院内死亡者供養、導師堀尾大僧正、講話は釋辨榮
 上人、山田妙雲和尚、郁芳隨園師、にして、會後席を改めて
 名譽會員税所敦子刀自追吊法會、下田女史の追吊演説あり、
 導師は同じく堀尾大僧正にして、二十餘人の僧侶と共に、散
 華、梵唄、音樂哀婉、殊に參會者一同、導師の發聲に従ひ、
 阿彌陀經を點讀せし時は、異香堂に薫じ妙風室に滿つるの思
 ひあり、來會者は會員婦人、參詣者、淑徳女學校生徒、男子
 賛成員等總計二百餘名にて、殊に丁重の法會は一同の肝腑に
 徹するの有難味ありきとぞ、又下田女史は、故刀自が生麥事
 件の際、國家多事、藩主の出府の折に詠せる、

ますらをにあらぬこの身のかなしきは

みどものかすに入らぬなりけり

の歌より説き起して、刀自の淑徳あると同時に、丈夫の魂を

て提斯の勞を執られ、又下田歌子女史も會員として熱心に時
 々來講せられ土岐善靜、山田妙雲、近角常觀等の諸氏も其車
 を枉げし事ありとぞ、

從來の導師

遊行上人、堀尾貫務大僧正、河瀬智宏、
 北野元峰、山田妙雲、等の諸老師、殊に駕を枉げて親切の供
 養を爲し、院内收容者は悉く渴仰の首を垂れて隨喜の涙を滌
 き、參會婦人は梵唄の妙音に感じて内心の清涼を覺ゆ、來會
 毎に必ず教味の津々を感受して愉快に歸宅すとぞ、さればに
 や、院の所在は實に東都の僻地なるにも關らず、毎回少くも
 三十人の來會者を見ざる事なく、且つ一年間役員の定まれる
 を見ざるも、參會婦人は皆之を自己のものとして、競ふて之
 に盡力する狀況は餘所の見る眼にも羨ましき程なりといふ、

大會

大會は一年三回、便宜の地に之を開き、會員相互の
 交情を温むるを以て主趣とする由にて、會務未だ整頓せざ
 るが爲、昨年は遂に之を開かざりしが、今年に至り、春季大
 會を催はさんとす際、偶々會長土方龜子刀自を失へるを以
 て、其追吊會を兼ね、漸く前々月即ち五月二十日を以て芝愛
 岩下青松寺に之を開けりとぞ、

其狀況

少しく舊聞に屬すれども、本誌讀者に事の序
 でを以て、當日の狀況を略報せん、其順序は先づ故會長土方
 夫人追吊供養、北野元峰導師たり、會員總代吊辭朗讀、後
 大會に移り、北野老師、下田女史の演説につぎて茶話會餘興
 として薩摩琵琶あり、陶友會あり、山田寒山子席上焼、倉田
 松濤氏席上畫、來會者中に扇子を寄贈するものあり、下田女

抱けりしを、六年有餘の長年月の交情より論じ來り、今後婦
 人の職とすべきは、家庭と社會とにある旨に結歸せりと、
 服部海軍中佐の追吊 税所刀自の追吊に際し、今回
 太活砲撃の際、名譽の戦死を遂げられたる、服部中佐の遺族
 より、其追吊を并せて行はれん事を乞ひ出でたるにより、一
 同喜んで之に應せしが、遺族の老母のたゞしげなると、
 下田女史が生麥事件の當時を想起して、支那の現狀に及び、
 延て中佐の英魂を吊へるとは、いたく參會者の袖をしぼらし
 めたり、

養育院内兒童の唱歌

例會講話の後、院内兒童は起

立して、一齊に唱ふるものは左の唱歌にして、大内居士の作
 歌にかゝれるものなりと、可憐の兒童、親を知らず、兄を見
 ざる、世にたつきなき少年が、哀婉凄涼の聲を發りて、唱へ
 出す折は、如何なる猛者も、時ならぬ時雨に袖を濕らすばか
 りなりといふ、其唱歌する意は、講師の有難き法音に接し、
 感謝の念を表する、御禮の爲なりとぞ、

甘露の法雨はふりかゝり、蓮の花は今ぞさく、
 微妙の鳥はこゝに啼き、福聚の海は量りなし、
 上は至尊の御身より、下は貧しき賤が男も、
 誰か佛のみめぐみに、救はれざらんものやある、
 我等衆生も諸どもに、皆この徳を具ふれど、
 わはれ凡夫の悲しさは、無明の雲にとざされて、
 いや／＼たどる愚痴の道、たいありがたや御佛の、
 光は我等を導きて、光明世界にめし玉ふ、

院内參觀

東京市の事業たる此大組織、中に幼年部あり、男子部あり、女子部あり、健康室あり、病室あり、職業場あり、感化部あり、不具あり、癡疾あり、嬰兒あり、老耄あり、あらゆる人間を収めて、千差萬別限りなし、組織上より研究せんとするもの、慈哀の涙を以て迎へんとするもの、以何なる目的によるに關せず、院内は隨意に參觀するを得べし、殊に四恩瓜生會の當日は院を開放して、殊に案内者を附し、懇切に説明の勞を執りて、參觀者を満足せしむるの便宜あれば毎月二十日、午後一時より、何種の人をとはず、半日の閑を割きて、杖をこゝに曳き、諸夫人と共に、紅塵の外に立ちて清談に耳を傾くるも、亦興味の津々たるものあらんと、會に熱心なる某氏は語れり。

四恩瓜生會役員 從來土方夫人會長たり、三島和歌子、濫澤兼子の兩夫人副會長たるのみにて、他の役員は一定せず、各自皆熱心之に従事し、些少の支障なくして一年を経過せるが、今や役員を一定するあらば、會務は猶一層の敏活を加ふべしとの事にて、先月の大會に於て、撰舉によりて、又は推選によりて、左の役員を定めたりといふ、但し會長は當分欠員にて進行すべしとの事なり、

- 幹事、板桓絹子 岩佐徳子 同千代子 伊澤千代子
- 池田米子 原禮子 波多野爲子 林田文子 細川糸子
- 鳥尾太以子 小野とし子 岡崎房子 大内文子 大草糸子
- 川原崎米子 吉井静子 高橋清子 武下かよ子
- 田村てふ子 成瀬さく子 瓜生留子 内田あさ子 野田

旭野慧憲、堀河眞吾諸氏の贊助によりて遂に神田今小路瓜生會事務所に於て之を開設し、毫も他に藉る所なく純粹無給にて、谷中より神田に至る、半里餘の途を過ぎて毎夜懇切に教ふる所ありきとぞ、生徒の数は二十名許にして、皆懇々として夜毎に之に至るを樂むの色ありきとぞ、

學舎の移轉 昨年夏期に至りて本郷婦人會有志願る學舎の舉を贊し、瓜生會と共に相携へて特に學舎の事に盡したしとの旨を述べ、本郷元町等正寺に之を移さん事を申込み來る、直に之に應じ昨年十月以降、遂に該寺内に於て之を實行する事となり、谷中の生徒は前者は業を卒へて悉く他に去り、西館、井上琢、木曾、富岡、井上香、松田、渡邊、高光、山田、恒川諸氏之に代り、高橋斯文、西山、堀河、増澤、常盤諸氏之を贊け、毎夜該寺内に於て咄晤の聲あらしむと、生徒は新陳代謝すと雖、毎夜十五六人を下らず、就中最も其功あるは、中途にして小學を退けるもの、或は全く學校に入りし事なきものにして、特に後者に至りては熱心の度他に越ゆるが爲に、僅々數月にして讀書、作文の如き、稍、見るべき實効を示すものあり、目に一丁字なき少年が一夜毎に進歩の形跡を表はすを見るは、實に愉快の事にして之が爲に教員は頗る勞を慰むるものありと、猶同學舎の成績は聞くに従ひ、後に掲載する所あるべし、

別働隊 前記施齋、夜學舎共に會の直接事業にあらず、稍別働隊の如き觀あるも、又茲に他の別働隊あり、故瓜生刀自の銅像を建設して、公衆の摸範たらしめんとするもの是なり

操子 栗塚龍子 矢野ゆか子 松田静子 松平壽満子
藤井安子 河野關子 兒玉周子 後藤ゆき子 安達利喜
子 天野時子 佐和濱子 三島かね子 下田歌子 島地
八千代子 宏園子 森文子

理事 幹事の互選による
事務員 常盤大定 茅根學順 瓜生祐二郎 桑畑静善
倉持愛山 香西權五郎 安達憲忠 箕浦清四郎
顧問 河野廣中 大内青巒 後藤新平 三島彌太郎
南條文雄 島地黙雷 村上專精

會の事業 發會日猶ば淺きを以て、未だ事業といふほどのものを見ず、又之を會員に質すに主なる婦人等の意によれば、會の基礎確立する迄は、黙々の間に過ぎ去るべく、當初より事を企て、之を繼がざるが如きは、故瓜生刀自の志にも背くべければ、秩序を追ひ徐進の方法を取り、少くも二ケ年間は内部の實力を養ふ所あらんとする事なり、會費は一ヶ月僅々五錢なれども此少許の會費猶毎月自然に集まり來り、實費を取り去りて剩餘あり、既に百有餘圓の繰越金ありといふ、

德風夜學舎 例會の當日窮民に施齋ある事は既に前記の如し、施齋が會員の有志によりて成立する如く、又他方に德風夜學舎の名稱を有する組織あり、是亦會員の有志者ど、贊成者どの手によりて成立するものなり、今同學舎の起因を聞くに、昨年五月の事なりけん、谷中眞宗中學生徒、岫、島、野田、平塚、豊岡、大伴、池田、等の青年有志相計りて、日曜學校の如きもの、或は夜學によりて社會の半面に幾分の光明を與ふるを得んとの希望あり、西山熊太郎、増澤明亮、常盤大定、り、設建事務所は神田錦町三丁目目にあり、建設委員には濫澤、河野、三島、後藤、箕浦等の諸氏の在るれば、必ず其目的を達するの日あらんを信するなり、

會の抱負 數年間實力を養成して後、如何なる事に向て進むべきか、聊か洩れ開く所によれば、先づ都下の佛教婦人會と聯絡を通じて共に、市の中央に會堂を設立し、會堂に附屬して教育慈善の組織を設け、廢物利用の方法によりて經濟を整理し、順次手を延べて、貧民傳導に適する組織を爲して、各宗の僧侶有志の精神に待つ等、各種の事業は會の將來に於て、必ず之を解釋すべき問題たりといふ、

入會 せんとするものは、左の諸夫人に申込まるべしとぞ、
下谷龍泉寺町原禮子 麴町區永田町二丁目二十八番地 河野關子 同一番町 岩佐徳子
是等諸夫人は發會當時より必ず參會して施齋に、幹旋に、出費を辭せず、勞力を厭はず、熱心幹旋の勞を執り、會の今日の盛況を呈せる、頗る是等の夫人の力によるといふ、
猶又賛成員にては安達憲忠、茅根學順、瓜生祐二郎の諸氏、每會出席して、是亦勞を辭せず、補助する所頗る多しとぞ、
小石川養育院内安達 本郷六丁目瓜生祐二郎
に申込む亦可なりといふ、

四恩瓜生會の主眼目的、頗る吾人の肯綮に中るものあり、吾人は聞くに従ひ、本欄に於て之を紹介するを辭せざるべし、本誌の幾分を割きて該會の記事に資し、以て該會の發達を助

くる所あるも、亦吾人適當の處置なるを信するなり。

◎教界彙報 佛骨奉迎使の一行は無事暹羅に着、去月十三日佛骨受領既に歸路に廻航しつゝあり、遅くも本月中旬歸朝するゝとの事、是より擬一行は佛跡巡拜の議出でたるも目下印度は飢饉、ペストなどの災厄あるのみならず、今回北清の事變も容易ならざる際としてこれを見合すことに決し直に歸路に就きたる次第なりと云ふ。西本願寺新法主は昨年佛跡巡拜を了り、夫より歐米漫遊の途に上り去る五月龍動に着、宗教視察をなし、先月廿一日既に巴里に向へりと云ふ、暫く同地に止まり萬國宗教大會に望み、其後は去て米國を歴遊し、本年十二月歸朝すべしと聞く、或は云ふ京都老法主の病狀如何により、二三年間留學なさるの模様もありと。佛骨奉迎の場所即ち覺王殿の建築地は東京に於てすべしと京都に撰ぶべしとの二説あり、多分京都に設けらるゝ事になるべし。日本大菩提會創立に就ては西本願寺は各宗と絶對的反對の態度を取り、既に末寺に向て不同意なる理由として訓令を發したり、世の批難の焦點に中るをも顧みず、其所信を狂げざる所この宗の特色とすべきか。大日本佛教青年會夏期講習會は沼津に於て開會する事は既に報じたるか、同地の郡長は最も熱心に幹旋せられ講習會に出席すべき人員も尠なからざるよし、又郡會議事堂を開會中貸與さるゝ旨承諾し來れりと云ふ。

漫筆

雜 錄

簡 堂 生

◎梅雨の時節にならぬさきから毎日雨大續きで鬱陶敷事であつた故此勢ひでは本物の梅雨となつたらとん嫌な天氣になる事かと思ふて居たら梅雨の最中は却て晴天が持切の昨今さつて世の中は想像巴外の者かな内閣の動搖も晴陰定まらず随分もつれて來て面倒になる事かと思ふて眉をひそめて居た様子だが義和團の騒ぎが御隣で八ヶ釜處なつたら大に地盤が固まつてモ一暫時此方の心配はないやうだ天象と人事共に斯くも有爲轉變のものかと思ふと何だか面白い様な面白くないやうな心持がする

◎政黨屋といふものは法螺は仲々吹き立るしいかにもエラン一に見えるが腕もさほど若しいのは少く膽玉も頗る小いのが多いやうだ、いざ鎌倉となると平生悪口を云て居る藩閥の元老株へペコ、頭を下げて丁度いたづら息子が阿爺に物をねだる様にいろゝ世理強ひをやる御機嫌の悪さ加減といふものは何とも論へ方ない是れから見るとさすが塙なれて居る元老連は始終上手にこれらのいたづら息子を翻弄しながら國政を取てゆく處阿爺は阿爺だけの事がある只追々時勢に後れて來るから折々今の世の中に合はん事を云張つてさかぬ事があは困たものだ

◎兎角人の上に立て多数を御して行には寛廣の度量と尤もらしき貫目がなくては駄目だ筋の立た事でも理のある事でも世の中に信用のない青二才が云出したのでは効力が少ない少々は世理な事でも鶴の壹聲はなかゝよく通るものだこの間の消息を解すれば不平は絶ぬ不平の心といふものがよい方へ向へば大層善いがある一方に向ふと遂にピストルか鐵道往生といふ幕切になるそれで何でも不平であつたら益々忍耐と勉強心を起してやり通し社會に信用と勢力を得る事に務めるのが一番だ

◎世の中が追々徳義の社會でなくて實力の社會となる様だ實力のある奴は徳義もヘチマもない無暗に他を併呑して我儘勝手な事をやるやうになる亞米利加の「トラスト」などは追々盛んに行はれて小會社小組合はドシドシ大會社に攻め立てられて降服せねばならぬやうになるといふ話だ我國なども追々斯ういふ事が流行る様になるだらう現に越後の石油鑛區を一手で買占んとする外商があるといふ事で大に警戒を加へて居るといふが殊に寒心の至りだ

◎鐵道が出來たり器械が發明されたりして大に勞力が省ける様になつて實に便利だが細民力役者は追々難儀になるやうだ開化に進むほど社會貧富の懸隔が甚しくなつて莫大な身上持も一方に出來れば食ふに食へぬ細民も益々へる倫敦に乞食が非常に多いといふのも其一端が分る、こんな勢で進んでゆくと文明開化といふものは富者には非常に好都合で貧弱者には非常に不都合なものとなる是ではドウしても社會問題が起る我國の状態も日に月にその場合に切逼して來るやうだ心あるものは早く這般の大問題を解釋せよばなるまい其第一

着としてまぐるいや藝者遊びをする墮落紳士其の改悛をさせ慈善事業に向はせねばならぬこの輩の傍若無人の所業こそ實に社會問題の勃興を早めるから

こふいふ譯であるから近頃政府も社會も漸く感化事業に着目するの運になつたのは甚だ慶すべき事だ政府が一面に監獄改良に着手し他面に感化法案を發表すれば一般人士も追々慈善事業を發企する様になり貧民學校育兒院等の設立所々に起り免囚保護、代用感化院の計畫追々方々に始まる次第時にどりて至極結構な事だ併しこれらの事業は人が正面から不賛成では得云はぬ性質のものだから我利我利野心家の乗する所となり易いから十分注意せねばならぬ又一方には保護救恤といふ事は余程上手にやらぬと徒らに依頼心遊惰者を増長せしめて非常の弊害を社會に流す事があるこれは非常に周密慎重なる調査と注意を要する點だ

◎豪商とか紳商とか云ふ金持連中が金さへ儲ければ誹られやうが悪まれやうが一向構はぬといふ風であつた時も何年前かには慥かにあつた様だが近頃は一轉して名譽といふ事を非常に喜ぶやうになつた様だ金がどれ程あつても名譽が少しもななくてはつららぬといふ風になりかけて來た少し斯うなるも金は餘程捨てても男爵がはしくなる正五位が羨布くなる社會から尊ばれもてはやされる事が各自のバニエールを多少満足せしめるといふ事になるこの方へ氣が移るとまぐるいやや藝者遊びは面白くなくなりて追々やめる様になるバニエールだろが偽善だろが兎角に是はよき傾向である誰れは實業學校を建て、旗を擧げたら公乃は商業學校で名を廣めやう彼れは慈善會の會長で巾をかすから我は感化院長で向ふを張てやろ

といふ風に競争にでもなつて来たら面白からう。理想家は斯の輩の事業かとして冷評するかも知れぬが吾等は寧ろこれを徳憑する何故なれば彼等はひますぎれば必ずわるい方に傾きやす境遇にある連中だから人まねで流行でも何でも構はんから善い事が爲てもらひたいからである。

◎ベスト流行の危険を恐れて頻りに大掃除大清潔法が實行されるは誠に結構な事だ併しこれが爲めに落着いて居た塵埃を空中に飛び立てる事は非常なものだ、かて、加へて塵埃の山が市内所々に数日間堆く列んで居る是れでも衛生に害はないのか知らぬ又た害は多少あつても仕方がないのか知らぬ何か一層よき清潔法は無いものかそれでは半ばし不清潔法ともなるかも知れぬ。

◎悪疫流行の折柄衣食住の大清潔法は衛生上いかに肝要な事に違ないが精神上のベスト病も漸く猖獗を極むる時節柄人心の保健上、心情の大清潔法が上一般に非常に急要だと思ふ。社會の制裁といふ一大帯と宗教信仰といふ強消毒劑とで十分な清潔法を實施したいものだ。此際精神界の醫者といふべき宗教家の大奮勵が望ましい。此處で盡瘁せぬやうな醫者は早く廢業させたがよい。

窮兒悪化の状況(承前)

窮兒立ん坊となる

次に、窮兒中不敏不肖なる者は如何なる状況に變ずる歟を述べん、是等の徒は奸智を要する拘摸竊盜の如き仕事には到底不

悪事を増長するに至るやの觀なきにあらず、始め良家の子と生れ所謂不圖したる出来心より悪事に陥りたる者は、入獄は彼等に後悔の念を起さしめ、教誨師の訓戒は愈彼等の改悛の心を確めしむるも、斯る窮兒より成育したる入獄者は、殆ど眞正なる人となるの望みなしといふべし。

右記し來りたる事情に依り窮兒なる者の結果は左の如し

一 智ある者は拘摸強竊盜となり監獄に入る

一 無智の輩は立ん坊となり行旅病者となる

一 不具癡疾の者は純粹の乞食となり行旅病者となる

斯の如く窮兒は、智者は盜兒と化して世を害し、結局監獄に投せられて公共の費用に養はれ、無智不敏の者、及び不具癡疾の者は、結局行旅病者となりて公共の費用に收養せられざるを得ず、嗚呼窮兒を放棄したるの結果は如何なる程度まで世を害し人を損ふや測り知るべからず、况んや彼徒が知る所は唯情慾の一途なるが故に、彼等の間に行はるゝ婚姻及び離婚の早くして、且つ容易なると、彼等が兒女を擧る事、及び其兒女は如何なる教育を施され得るやを思へば、實に慄然として恐るべきものあるなり、東京市内一年棄兒の多きも、其原因是等の徒の増加に基くものにあらざらんや。

舊幕府下の非人と維新後の乞巧

舊幕政の乞巧に對する制度を見るに素より文明の制度に背反する者たるは論なしと雖も兎に角今日の如き乞巧の悪化して國患となるが如きに比すれば大に優るものありしと云ふも不可なかるべし彼の幕政下にては實に人類を區分して人と非人

適當なるが故に、幸にして拘摸の親方又は其舊知人の選抜を蒙らず依然として窮兒なり、身は窮兒なれども、日一日年一年成長するに従て、人の哀憐の情を惹くと薄きが故に到底乞巧を以て生活するを得ず偶々人の店頭を窺ふて錢物を奪へども、動もすれば見付られ捕へられて辛き目に遭ふが故に彼れ等は成長すると共に種々ある業務を見付て是に従事す、其業務には眞の紙屑拾ひあり、魚河岸などに集て魚類の頭腸部を拾ひ集て肥料に賣却するあり、或は山の手の坂道橋詰などに立ちて、車の跡押などをなして生活するものあり、世に之を立ん坊と稱す、彼等は一所不住の無宿者なるが故に、平日人を損害するにあらざるも一朝病に臥す事あらば、必ず警察の手を経て公共の救助を受けざるべからず、行旅病者として年々養育院に養育せらるゝ者の過半は皆此種類なりとす。

「カツパライ」の窃盜に化す事情

前に記せし乞巧、屑拾ひ小盜の三事を兼業する「カツパライ」なる一種の者は研究に研究を加へ、其年の長ずると共に悪事も亦漸次に増長して、遂には専ら竊盜を事とするに至るものなり、抑も彼等幼稚の時より寸毫の教育を受けずして、唯他の金錢物品の掠奪法の教授を受けて、成長したるが故に、才智も専ら悪事に向て發達し、彼等の腦中には盜賊の悪事たる觀念だにある事なし、彼等の仲間にては入獄を以て年貢拂に行くを稱せり、既に入獄を以て租税と心得たる程なれば、假令牢獄に投せらるゝも改悛の念を起すとなし、彼等は却て牢獄を以て巧妙なる専門學校に入りたる心事を以て悪事を學び、益

の二種として人を分つに業を以てし士農工商及薩多の五種族とし乞食をなすものを以て非人種族となし人を人類の度外に置き諸國に非人頭を設け市街村落には必らず非人番を置き以て彼等を取締らしめたり一度非人の中間に入りたるものは人權公權を剝奪せられて法律の保護に預るを得ず其代りとして彼非人には乞食の特權を許すが故に白晝公然天下を横行して乞巧をなす事を得べし若し農工商にして身代を分産し一定の住ひを失ひ墮落して乞食を爲すに至れば非人頭の配下に屬し非人番の監督を受けざるを得ず然れども彼れ等は公然乞食をなし得らるゝが故に竊盜となり拘摸となるが如き危険の行爲を爲さるゝも露命を繋ぎ得るのみならず中には裕かに生計を營むに至る者少からず且相當の貯蓄を得て自己の領主なる非人頭に對し相當の獻金を爲さば元の農商に歸復する事も得らるゝかり之を名けて足を洗ふと云ふ萬一非人にして悪事を爲さん歟非人番は忽ち之を捕へて之を拷問し輕きは自ら之を所斷し重きものは乞食等が生殺與奪の權を有する非人頭に引渡す非人頭は之を極刑に處して自己の職責を明にするも共に他の配下の者共をして戰慄恐懼せしめ再び罪惡者の出ざらん事を勉めしなり彼等の極刑は全身の皮膚を剥ぎて之を殺戮し之れを皮剝の刑と唱へしといふ斯の如くなるが故に乞巧は寸毫の教育なきにも拘らず悪事をなすものは殆んど稀なりしなり斯る方法たる殘忍苛酷なりと雖も浮浪無賴の徒をして世に横行して悪事を逞むせざらしむるの手段として誠に行届きたる仕方にして遺漏なしと謂つべし。

然るに王政維新に際し斯の如き非人の枯骨も雨露の徳澤に浴して公私の権を興へられ一般の王民とは化せしめられしなり王民と化せし代りには乞食の特權は剝奪せられ皆優勝劣敗の競争場裏に立て労働せざれば衣食する能はざるの人はなりしなり既に非人なく乞食なし萬一乞食を行ふものあれば之を驅逐し去るは警察官職務の一項に掲げらるゝ事となり以て今日に至れり何れの世如何なる政府の下にても獨立生計を營む能はざるの民を生せざる能はず放逸遊惰にして乞食をなすが如きは實に人類の非行にして惡むべき所業なりと雖も尙幼少にして養育すべきの父母親戚なく不具癡疾又は老年にして頼るべき所なき者をして單に之を驅逐し去らば彼等は溝壑に轉じて死するにあらざれば他の物を竊取して死を免るゝの道あるのみ嗚呼彼等を驅逐するは恰も孤獨者に對し汝は乞丐をなさんよりは寧ろ盜兇となれよと教ゆると何ぞ異らん否竊盜拘摸の製造所を設けたるものと謂ふも不可なきなり今や國家凡百の制度悉く整備を告るに際し乞丐窮兒を放棄して惡化せしめ囚人を増加せしむるは豈救貧制度の不備にあらずや

信 象

克己の心

清澤滿之

克己と云ふことは全體變なことである、己が己にかつと云ふことは、先づ無理なこと、云はねばならぬ、然るに其無理なことが甚だ大切なことであり、甚だ必要なことであり、シ

カシ之を克己と云ふときは、儒教では昔から喧しく云ふてあるから、人が耳慣れて通常のことと思ふ様でもあるが、其事を精密に考へて見ると頗る妙なことであり、夫をざつと解剖して見れば、先づ己と云ふものが二つあるわけである、己が己にかつと云ふのであるから、かつ方の己と、かたるゝ方の己と、己が二つなければならぬ、己が二つあるとして見れば、其ドチラの己が本統の己であるか、何故に夫が本統の己であるか、又何故に本統の己の外に他の己があるか、色々の疑問が澤山起ることであるが、今は一々夫等を解釋しようとは云はぬけれども、實際我等の日常の行爲上に此事があるではないか、何事かを爲したるときに、是は惡るかつた、此次には此の如きことは爲すまい、と云ふ様なことは、通常のことである、これが取りも直さず、克己の一端である、自身自身の爲すべきことを自分自身で制裁するのである、人間の行爲は「己」云ふことがあるから貴いのである、善に就き惡を去ると云ふことが出来るのは此作用があるからである、此事は爲さう、此事は爲すまいと云ふ區別が立つのは大切な作用である、尤も唯其思ひのみにて實行が其通りにならねば結果がないことなれども、實行の基礎は思案分別であるから、先づ思案分別が肝要である、其思案分別の所に己と云ふものが二つあることである、或は之を大我小我と云ふ人もある、古い所では天理人欲と云ふこともある、ソレ唯此事は爲さう、此事は爲すまいと云ふのみでは、本統に克己と云ふことを解して居るとは云へない、本統に克己と云ふことになる、

善惡とか正邪とか云ふことを知らねばならぬ、而して善と正とは之を爲さう、惡と邪とは之を爲すまい、と云ふことにならねばならぬ、夫故に彼の自由の意志とか意志の自由とか云ふことが大切なることではあるが、自由意志のみにては、善に對しても自由、惡に對しても自由であるから、夫丈では道徳の基礎は確立し得ない、意志の自由をして善に就かしめ惡を去らしむる所の指導者が最も必要である、此の指導者がなければ、自由意志も何の價値もないことになる、此の指導者がなければ本統の克己と云ふことは成立しない、然るに此の指導者は何ものであるか、宗教家や道徳家に論議の必要があるのは此疑問の爲である、實際は各自に反觀内省して見るがよい、各自の心内果して正の如きものあるや否や、夫があらばよし、なければ勉めて之を求めねばならぬ、又假令之あるも微力ならば勉めて之を養成せねばならぬ、サテ之を求め之を養成せんとせば、吾人は彼の天理人欲とか、大我小我とか云ふ如きことを討究することが必要である、討究と云へば六ヶ敷き學問をせねばならぬ様であれども、決してソレではない、本式の學問と云ふものは止め場のないもので、一疑問が解くれば他の疑問が生じ、決して底止する所なきものなれども、今茲に云ふ所の討究は畢竟彼の善惡の指導者を求め又之を養成する爲にするのであるから、其目的さへ達すれば何時其事を中止しても差支ない、實際ソレニ骨折らずとも隨分目的が達せらるゝことである、尤も克己と云ふことは智力上の討究に基かずとて感情上の感化によりて出來ないことはなければ

ども、夫には餘程勝れたる摸範がなければならぬ、先づ同時に代に生きて居る人の間に其摸範を得ることは六ヶ敷い、過去の大人物を摸範にするより外仕様がな、然るに過去の人物となるも亦疑念の解けない點が生じて困ることである、且つ過去の人物の中に就て克己の摸範を定めんとするには、其前に既に克己と云ふことを自ら能く了解せなければならぬ、かちして智力上に於て克己と云ふことの成立を了解するのは、何れにして最も必要なことである、今其成立の説明をするとは一寸は出來ざれども、其參考の一端に供すべき爲に、克己と云ふことを言ひ換へて見れば、我情を破斥すると云ふても私心を制服すると云ふても、人欲を去ると云ふても、私利を離ると云ふても、自己を忘ると云ふても、自力を捨ると云ふても、其他色々云ふても差支ない、シカシ其言ひ方によりて或は深く聞かえ、或は浅く聞かゆると云ふ感じがあるかも知れぬ、けれども、夫は言ひ方に深い浅いがあるのではなく、聞く人の聞き分け方に深い浅いがあるのである、大體深いとか浅いとか、興味があるとか興味がないとか云ふのは多くは其事に關する経験の多少によるものである、一度よりは二度、二度よりは三度と、其事に關する経験が増せば増す程、其事に對する感じが深く興味が多くなるものである、善事に進めば善事が段々面白くなると同じく、惡事に進めば惡事が段々面白くなるのは、此わけである、今克己の事も無論全様であるから、始めは一向つまらない又いやなことの様なれども、少しく此事に注意し此事の経験を積めば段々愉快を感ぜらる

とである、吾人は克己の反對の方に興味を覺ゆる前に、克己の方に勝れたる興味を覺ゆる様に修養して置かねばならぬ、克己と云ふことを不快に思ふ様では、道德や宗教の道に進むことは六ヶ敷さ、

會 報

◎各地巡回記事

山 梨

四月十六日久我侯爵及家從中堀氏、御殿場に着、眞岡文學士東京より此處に會す、北都留郡初狩村法雲寺住職渡邊佛海氏此處に出迎はれ、交芳川雄悟氏も既に來着せられたれば、一行は鐵道馬車に乗じて須走に向ひ人車を雇ふて嶮坂急嶺を迂曲し吉田を過ぎ黄昏、谷村圓通院に着す、同夜眞岡文學士は日本佛教徒の覺悟を題し一場の演説をなし、續て久我侯爵は承陽大師大遠忌豫修に付き來縣したる旨を述べ懇々同盟會設立の要を演ぜらる、同日演説を終り寢に就きたるは夜十二時過ぎり、四月十七日谷村を發し初狩村に小憩し、笹子峠を踰え勝沼町萩原繁吉氏方小憩、此間石川素童氏の一行は田中童策方に小憩、同夜、日川村志村勸兵衛氏方一泊、十八日、仲廣祖仙、市川全學、南條太隱の諸氏に先導せられ、正午大泉寺に着、同寺に於て十八日十九日二十日の三日間、法要あり、別所別、林間二氏専ら奔走の勞を取られ、眞岡文學士は晝夜演説、十九日久我侯爵の演説あり、大に同地人士の宗教心を喚起せられ、二十日、甲府市光澤寺大谷派別院に於て、眞岡文學士は、我邦今後の宗教界に就き長時間に渉る演説をなし、侯爵は續て同盟會設立の要を淳々として述べらる、終て同地有志者の會合にかゝる慰勞會に臨む、來會者は裁判所、司法官を初め辨護士、中學校長等無慮五十名なり

日午後三時頃漸く出立し、石川、芳川諸氏の一行と共に廿二日富士川を下り、御殿場に於て闘らず、侯爵と會合、同夜歸京す

二十八日相模國小田原、函東佛教國民同盟會の開會式に臨まんがため、同日久我會頭、眞岡文學士及繩手家從は同地に行き、足柄下郡蘆子村桐座に着せしは正午頃より午後一時開會、松本榮太郎、同會々頭西岡逾明氏の演説あり、久我侯爵は同會總裁たることを承諾せられ、一場の演説あり、芳川雄悟氏續て「不生不滅」に就て演説し、眞岡文學士は「日本國民の三大缺點」と題し滔々數千言を費し、右終て散會し、同夜同會發起人諸氏の親睦會に臨み翌日歸京せり因みに同會、發起人及役員は左の如し

函東佛教國民同盟會首唱者
秋田昇龍、福田大梁、萩西貞、中邑南海、増田俊雄、岸秀岳、安藤龜太郎、小澤衛平、久津同清左工門、高橋師原、中山榮吉、府川久太、全幹事
小澤秀雄、磯崎大次郎、川邊正之助、石塚八兵衛、清水義路、田邊佐五右衛門、松本榮太郎、曹根田忠誠、市川萬太郎、

本會規約
第一 本會ハ函東佛教國民同盟會ト稱ス
第二 本會本部ヲ相陽足柄下郡蘆子村大長院ニ置ク
第三 本會ハ佛教各宗信徒及通佛敎的の感化ヲ受ケタル者ヲ以テ組織ス
第四 既設新設佛敎團體ニシテ本會ノ旨趣ニ賛同提携セントスル者ニ對シテハ會長及總務委員ノ決議ニ依ル
第五 會員ヲ分テ特別會員、正會員、通常會員、贊助會員ノ四種トス
第六 本會ノ趣旨ヲ普及セシメンカ爲メ春秋二期高僧及ヒ諸名士ヲ招シ大演說會ヲ開キ佛敎ノ光輝ト吾人ノ道德ヲ増進セシムル事
但シ臨時ニ開會スル場合ハ其時々報告スヘシ

第七 會員中遠隔ノ故ヲ以テ辨士ヲ聘シ開會セントスル者ハ本部ニ具狀シ諸般ノ指揮ヲ請フヘシ

役員

第八 本會ニ左ノ役員ヲ置キ一切ノ事務ニ従事ス
會長 壹名 (推 戴) 副會長 貳名 (總會ニ於テ推定)
總務委員 六名 (發起人之ニ當ル) 幹事長 壹名 (幹事中之互選)
幹事 若干名 (會長指命) 評議員 若干名 (幹事指命)
計二名 (總務委員互選) 評議員 若干名 (幹事指命) (以下略)
但シ役員ノ事務章程ハ別ニ之ヲ定ム

馬 群

五月一日、群馬縣群馬郡室田村長年寺に於ける各宗同盟會春期大會に聘せられ久我會頭、眞岡文學士、芳川雄悟氏之に臨む、同寺住職倉澤智丈氏熱心に奔走せらる、

讚 岐

五月十三日、眞岡文學士は四國佛教徒大會に臨まんが爲め出發、十五日高松に於ける大會に出席せり小栗憲一、酒井玄覺、長麟城、五百井眠雄諸氏演ぜらる、同會は脇屋大潤、大佛法音、武田道潤、片桐古陶、遠藤紹珪諸氏専ら奔走せられ十五、十六兩日開會未會有の盛會なり、十六日右一行の爲、慰勞會を開かれ、瀬尾等、佐々木純一、岡内峰太、松本榮、向井忠三、谷一鸞、八十川碧、山田哲司等無慮四十名來會せらる十七日眞岡文學士は多度津を経て十九日歸京す

千 葉

二十日、千葉第一高等學校醫學部樹德會大會に付村上博士に從ひ本多、眞岡二文學士は出張せり

下 野

二十一日、下野國芳賀郡高田別院に於ける宗祖大師降誕會に付眞岡文學士は同地に行き、廿一日、二十二日の兩日宗祖大師降誕會に就き所感を述べられたり、兩日共非常の盛會なり、因みに四國高松には脇屋大潤氏等目下南海佛教徒同盟會組織に盡力せられ、又丸龜市善龍寺山田哲司氏四國佛教團を組織せられたり其趣意書并に團則は左にかゝく

四國佛教團趣意書

夫れ佛教に我が皇室の尊嚴を重し奉り國家の元氣を發ひ來るこま茲に二千有餘年之を歴史に收ふれば極めて緊切なるものありて存す可くも先皇勅を垂れて佛敎の安置を宣し賜ひ祖先繪圖を裏け子孫今に到れり臣民たるもの誰か勅旨を奉答せずして無佛の家に住するを得んや子孫たるもの亦誰か祖先の遺志を繼ぐして佛を毀り位牌を燒て何ぞ異教に歸し得へんや當今風氣振はず道義衰し往々にして異教に墮るものあり時恰かも内地開放の運に屬し異教倍々多からんとす爰に於てか不肯等敢て自から頼るに違あらず奮然起て佛教團を結成し我同胞をして共に心を同敎の眞理に樹て身を皇國の忠良に致さんこ欲す希くは四國佛教徒諸子來り圍せよ

主唱者 豫備陸軍憲兵少尉正八位勳七等 蓮井麗殿
善龍寺執事勳八等 河口秋次
山田哲司

團 則
第一條 名稱 本團を四國佛教團と稱し、但し四國各地に支部を置き本部と連絡す

第二條 本部 香川県丸龜市に置く、但し當分の内香川県丸龜市通町善龍寺内に事務所を置く

第三條 目的 四國は一個の離島なるを以て對時的四國佛教徒一致團結を以て社會風氣の振興國民の統合力並に佛教の眞面目を維持し異教等の害を除去せんことを以て

第四條 主義 本團は佛教團なるを以て勿論宗派的の依怙主義を擲ら新佛教の汎義を以て其主義となす

第五條 業務 本團の目的を達せんが爲めに左の業務を執る
一 機關紙發行
一 布 教(軍隊、監獄、會社、部落等)
一 演説々教討論及ヒ講義

第六條 團員 本團は佛教を奉ずる國民を以て團結す、但し團員を別て左の四種とす
一 名譽團員 一 特別團員 一 正團員 一 賛成員

(イ) 名譽團員は學識高徳者若くは本團に名譽を與ふるものと認むるときは本團評議員會の決議を経て團長之を風請す

(ロ) 特別團員は資金寄附者若くは本團に特別功勞あるものを以てす

(ハ) 正團員は一家の戸主にして本團の趣意を体認し及び機關紙購讀の義務を有するものとす

(ニ) 賛成員は若者男女を問はず本團の趣意に賛成するものを以てす、但し入團の際門標費として一回限五錢を納むべし

第七條 待遇 團員は本團別々定むる内規に依り相當の待遇を受くるものとす

第八條 會議
 第九條 入團
 第十條 役員

正團員以上より若干の評議員を撰舉し本團一切の事項を評議す
 入團せんとするものは團員一名以上の紹介を得て本(支)部へ申込
 み團員簿に署名捺印するものとす、但し團員は別團の門標を各自
 の門戸に釘付表示するものとす
 本團に左の役員を置く
 一團長 一名 一幹事 二名 一主記 若干名 一會計 二名
 役員は別項の役員章程に依り職務す、但し支部に掛るものは本部
 役員章程を準用す

新刊寄贈書目

國學院雜誌	六ノ六、	神田	帝國學
教育公報	二二六、	小石川	帝國教育會
十善寶窟	一三三、	下谷	三白園
三眼	一四、	神田	三白園
天地人	三六三、七、	全草	富山才
社會	二〇一、五、	全田	博文堂
大帝國	二〇一、一、二、	淺草	佛學會
佛敎	一六二、	神田	光融會
天聲新聞	五、	赤坂	關文會
東京每周新誌	一、二、	赤坂	關文會
無黨燈	每號、	赤坂	關文會
禪宗	五ノ六、	京都	無黨燈社
德風	六二、	京都	貝葉書院
唯心	九三、	伊勢	德風書院
北海敎報	六、七、	伊勢	唯心書院
正法輪	三一、三二、	京都	正法輪社
婦女新聞	一、二、三、	京都	婦女新聞社
二諦敎報	三三、	京都	二諦敎報社
明鏡	三三、	京都	明鏡社
世界管見	七ノ六、	全同	全同社
法理哲學	一五、	小石川	東洋哲學社
東洋哲學	三二、	伊勢	扶桑敎會
松のみどり	三三、	京都	本山文書科
宗報	三五三、	京都	宗報社
佐久新報		京都	佐久新報社
教友雜誌		山梨	教友雜誌社

注意

本年夏期講習會は西部廣島に開會の旨豫告致置候處、北清事
 件の爲廣島市は軍隊派遣の要衝と相成、會員の宿泊に差支候
 間止むを得ず開會を見合せ、東西兩部沼津に合併して相
 開き候、此段來會の諸君に謹告仕候也
 明治卅三年七月一日 大日本佛教青年會

佛敎講話錄 第八輯

敦賀港寫真版挿入	釋宗演師
佛敎夏期講習會略歴	村上專精師
佛敎一瀾三十則	島地默雷師
佛敎我觀論	清澤滿之師
佛敎信證大意略說	江村秀山師
破邪顯正談	江村秀山師
諸尊宿格言	江村秀山師
圓頓章略解並序	江村秀山師
發菩提心論開題	江村秀山師
發菩提心論開題	江村秀山師
本書は作年七月越前敦賀港に於て開會したる第八回夏期講習 會講話錄なり今回製本なりしを以て廣く有志に頒つ 定價一冊貳拾五錢郵税四錢郵券代用一割増爲替振込局 は森川局宛	
發行所 本郷區森川 大日本佛教青年會 町一番地	